

でいました。五歳の時には子供はおじいさんと同じに手まねで発表するようになつてしましました。従つて他の子供と遊ぶ事もありませんでしたが、この子も普通の指導によつて言葉を覚え話せるようになつて来ました。このように環境そのものに缺けてゐると非常に困るようになるのです。子供の生れた時から普通に生長出来るよう、環境を作つてやる事は大切な事です。さて、團體施設や幼稚園、保育所へ入れて育てるということ、これには何歳からがいい」という一定標準がありましようが、幼い時には成長発達がそれ／＼違いますから、個人差を認めて個別的に扱つた方がいいでしよう。殊に児童福祉法にありますように、家庭の環境に缺ける時保育所へあけて、年令を何歳ということなく、入れて扱うことにあります。これは個人差がはつきりとしていますので、それを認めて個別的に扱うということです。子供はよく観察しないと、その時／＼によつて言つた事の意味が違つていて喜んでいました。そこにたま／＼「お手々つなないで」という言葉がありましたが、子供は手をつなぎたくなつて「手をつなぎましよう」と申しました。しかしこれは相手を認めて手をつなぎたいためではなく、自分の立場から相手がほしいのであって、グループ的情感が發達してきただといふ意味ではあります。一年八、九ヶ月位では本當のグループ的指導のなしうる年令になつてゐるとはいひません。同じように子供がまりを投げる時、相手が必要でありをなげてゐるという事がわか

ります。この時はグループ的に扱ひうのです。同じ發達にしてもこのように違います。個人差を認めて、それに應じた扱いをするのは幼稚園でも保育所でも同じですが、組織的に施設に入れて扱わねばならぬという時は個別的に扱つてほしいのです。

司會者——シンボジウムという物はいろいろの御意見があつかり合つて火花を散らす所が面白いのですが、文部省視學官さんと厚生省保育課長さんのお話は、大きな立場からみていらつしやるので、私共の考える仕方とは違い、少しも小さいぶつかり合ひがありません。(笑聲) 次に心理學的醫學的教育學的方面から、學問的に十分言い争つていただけたら面白い、面白いなんて失禮ですが、興味が湧くと思います。山下さんにお願いしましよう。

○心理學的立場から

愛育研究所

山 下 俊 郎

山下氏——うまくぶつかり合えますかどうかわかりませんが、心理學をやつてゐる立場からついて今までの心理的な研究をもとにして、幼児の教育上の年令、區切りの素材を提供したいと思います。その意味では吉見さんとぶつかると思います。(笑聲) 醫學的には後に齋藤先生が話されますか精神的にも身體的にも一つの基準をおいて考へる必要があると考えます。

さて保育年令を考へるについてはいろいろの年令が問題となります。児童福祉法でも、生れてから六歳までとなりました。今までは生後六ヶ月とか、一歳とか、いろいろの區別もあつたと思います。次にこれは三木視學官にふれていいたゞきたかつた問題ですが、學校教育法では三歳からが入園する年令になつています。それがどの根きよできめられたか問題です。就學年令は今日六歳となつています。それを五歳にしている國もあります。ところによつてはもと下の所もあります。イギリスアメリカのナースリースタルの如きは二歳から五歳までと年令の區別があります。保育要領では二歳から六歳までに一應區切つてあります。これらを考えますと、二歳三歳五歳六歳が問題となります。そこで年令の區切りについて一般的に幼兒の精神發達からしてそれ／＼にどんな意味があるかどんなところに重點があるかを、大いそぎでなでて通り、最後にまとめてみたいと思います。

ところで、二歳以前はどうでしようか。今の日本の制度では、児童福祉法に於ては生れてから六歳までですから、これに該當する年令が含まれています。心理學者は一歳までを乳兒期とし、人によつては二歳までを乳兒期と區切る人もあります。運動の發達からみて二歳以前は子供の體を運ぶ全身移動が出来るように、運動能力が完成される時期であります。又感覺の發達から云えれば、基礎的には乳兒期でありますが、知覺感覺をもととして、長さ重さを比較したり出来るのは、五六歳頃であります。故に二歳以前は此のシンボジウムでは

さて保育年令を考へるについてはいろいろの年令が問題と

比較的重點にはならないと思ひます。

まず運動では二歳以前は日本の子供では一年三ヶ月が歩き始めて、凡そ歩行運動が二歳までに出来ます。その後大體の運動が出来るようになりますが、例えばその點の資料についてモントソリーの塔についてしらべてみます。ボールドウイン及ステッチャーによると三歳代までは極くまでのあります。又同じモントソリーの教具の中に、棒の真中にボタンがあつて、これをかける仕事があります。これをやらせると、三歳代まではましく、四歳をすぎると發達します。また、全身のバランスをとつて歩く意味で平均臺は四歳から自立つてうまくなり、五歳代六歳位までに非常だうまくなります。こう考えると二歳から四歳までと、四歳以上とが運動に於て區切りとなります。

次に言語の發達で云ひますと、これにはいろいろの側面がありますが語彙の増加で考えますと、年々幼兒が獲得する言語數の最も多いのは、四歳代の所であります。子供の言葉の發音が赤ちゃん的でなく、ちゃんととしてくるのは四歳代に著しく、五歳になると大部分は完全になります。これは愛育研究所の研究で示されています。これで見ると言葉の發達は一歳ちょっと前から現れます。満二歳までの品詞の種類についてあらゆる種類が出て、四歳までにその基礎が出来て四歳以上は話し言葉の完成の時期となる事がわかります。その他記憶とか注意とか精神機能の方面では、記憶は三歳に明瞭な區

切りがあり、抽象的記憶も三歳すきに始めてなされるようになります。注意力の発達からみると、遊びに對して注意を持続出来るかどうかについても四歳頃に飛躍的發達が見られます。積木、クレヨン、ねんど細工という創作活動、物を作ることについては、もともと材料が圓形的であると四歳頃から始まり、その他は五歳頃からまとまつて來ます。知的方面から思考力は五歳頃から物の定義が出来る事から見て一段の發達が見られます。子供の考え方は幼兒的特色が七歳頃まで續きます。

情緒の發達から見ますと、二歳から五歳までの間にいろいろの情緒の發達が形づくられるといわれています。

次に子供の社會性については、三歳過ると友達と積極的に遊びたがります。一人遊びのへつてくる傾向は三歳から四歳にいぢるしいのであります。又大人との關係に於ていわゆる反抗期は二歳から四歳の間であります。次に基本的習慣については二歳から五歳の間に一通りの事が身につけられます。いろいろの方面的事をざつと申し上げましたが、これに對する實驗的材料は時間がないので略す事に致します。

これをまとめて考えますと二歳は子供の生活形態の上で一つの區切りとなります。三歳は記憶、社會性で一つの區切りとなるという事も若干うなずける事であります。その他精神發達からみて、二歳から四歳までが一つの區切りとなり、四歳以上が又一つの區切りとなります。もう一つ残る問題は六歳以上七歳代までは幼兒的精神構造が續くという事が云われ

ます。制度の上からは幼稚園の年長の子と小學校一年とを一緒にするという問題も出てきます。又描畫に於ける意圖が五歳に出てきます。基本的習慣情緒的發達に於ては五歳が區切りとなります。

さて結論としましては、どこで區切るかははつきりと申し上げられませんが、凡そその發達の事實をかんたんにまとめて申し上げただけであります。

司會者——三木、吉見兩先生は個人差があるという御意見のようでした。それに對して、山下先生は、それはそうだが一般兒童として年令により區分といつものがあると云われました。醫學的方面からも大いに又検討していくべきましよう。齋藤さんどうぞ願います。

○醫學的立場から

愛育研究所 齋藤 文雄

齋藤氏——教育という言葉がドイツ語のエルチーフング、即ち子供の心やからだからいゝものを引出すという意味からすれば、教育は生れたその日から始めるべきだと考えます。個人的幼兒を對象と考えれば年令的なことはありませんが、一定の場所に集める集團的な扱いは何時からやつてよいか、その方面について今日の議題があるのだと思います。結論を言えば、普通に育つている子供なら醫學的立場からみれば三歳以上がよいと思います。その理由は、先ず身體的發育の立